

(様式3)

P-253 腎臓病教室への薬剤師の取り組み

～患児に寄り添った腎臓病教室を行うために～

○齋藤 あゆみ、野田 有貴子、愛甲 佳未、由良 沙央里、大前 隆広、石田 達彦、上田 里恵、
福井 由美子
(こども病院 薬剤部)

【はじめに】

当院では2015年より毎年、腎臓病の患児と保護者を対象に、疾患や治療の理解と自立を支援することを目的に腎臓病教室を開催している。この教室で患児に寄り添った講義となるように薬剤師が実践している取り組みを報告する。

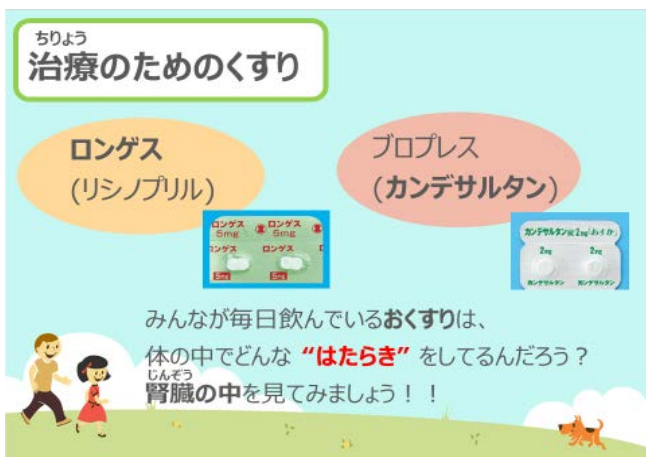
【教室概要】

開催年度	対象疾患	参加者
2015年	ネフローゼ症候群	小学生3名、中学生5名、高校生2名、大学生1名、家族19名
2016年	慢性腎炎	小学生2名、高校生3名、家族11名
2017年	ネフローゼ症候群	幼児1名、小学生9名、中学生4名、家族22名

- ・頻度：1回/年
- ・構成：腎臓内科医師、看護師、管理栄養士、薬剤師
- ・対象：当院腎臓内科外来通院中の患児と家族
- ・時間：約2時間（うち薬剤師講義15分）

【内容】

講義の内容は医師と協議し、使用頻度が高く、特に説明が必要と考えられる薬剤について講義を行う。その際、主に患児を対象として行うため、絵や写真、平易な言葉と表現を用いて、患児が理解しやすいように講義を行っている。また、端的にまとめた講義にすることで患児が集中力を継続できるように心掛けている。これらの取り組みにより、治療薬へ関心を持ち理解を深める事を目標としている。教室前後でアンケート調査を行っており、患児と家族の意見を次の教室に活かしている。



1 アンケート結果

教室前に患児本人に行ったアンケートでは、「自身の疾患や治療について興味がない」という意見が多かったが、教室終了後のアンケートでは、「自分の薬の名前が言える

ようになった」「服薬時間を意識するようになった」などの好評な意見が得られた。

家族を対象に行ったアンケートでは、教室前は「患児自身に疾患や治療に興味を持って欲しい」や「薬の服用を嫌がる」など、患児のアドヒアランスについて難渋している事が分かった。また、講義内容の資料が欲しいなどの意見も得られた。

2 今年度からの新たな取り組み

前述でのアンケート結果や、これまで開催した教室の反省点から、今年度の改善点として、講義内容の資料を配布する事と、教室を2部制にする事にした。

(1) 資料を配布

講義内容についての資料を配布することによって、腎臓病教室の間だけでなく、帰宅後も見返すことが可能となり、より理解が深まると考えられる。また、患児が出席できず家族のみの参加者もいるため、帰宅後に患児への説明のツールとして用いる事が可能となる。

(2) 教室を2部制へ

今までの教室では、対象年齢が幅広かったために患児の間で、理解度の差が大きい事が分かった。年齢別の講義内容にすることで、より理解が深まると考え、今年度より学童中期までと学童後期以降の2部制で講義を行うこととした。

【薬剤師の新たな取り組み】

薬剤師として今年度からの新たな取り組みは、2部制の講義を行う際に、年齢別の具体的な理解度到達目標を立てて説明を行う事である。

学童中期までの患児は、家族から適度な支援を受けながら、自身の治療薬に向き合い、薬を服用することの重要性を理解させる。また、学童後期以降の患児は、自立を考える年齢となり、患児自身で薬の内服から保管までの自己管理が必要となる。そのため、お薬手帳の活用を呼び掛けるなど、自己管理のきっかけ作りとなる内容を充実させ、また家族に対しても患児の自立を考えさせる内容となる事を目標とした。

【考察】

小児の慢性腎疾患では、早期より多職種による支援プログラムの実践が推奨されており、継続した支援や取り組みが必要である。また、薬剤師から薬について具体的な説明を行うことで、服用の重要性を伝える事が可能となり、アドヒアランスの向上に貢献できると考えられる。

今年度2部制で講義を行った結果から、患児の理解度などを確認し、今後の教室をより良いものにしていきたい。